

「県民と県議会との意見交換会」 平泉町会場 の概要

- [日 時] 令和4年4月27日(水) 13:00~15:00
[場 所] 平泉文化遺産センター ふれあいホール
[テーマ] 県南地域における文化芸術を生かした地域づくりについて
[参加者] (6名)
板 垣 崇 志 (るんびにい美術館アートディレクター)
大 内 友 規 (前沢ふれあいセンター 主任)
新 田 光 志 (遠野市芸術文化協会 会長)
菊 池 幸 介 (合同会社ひらいずむ 代表)
阿 部 喜一郎 (北藤根鬼剣舞保存会 会長)
吉 田 聖 樹 (牧澤神楽 代表)

[出席議員] (9名)

佐々木朋和議員(座長)、小西和子議員、岩渕誠議員、岩城元議員、工藤勝子議員、
神崎浩之議員、白澤勉議員、飯澤匡議員、小林正信議員

◆ 参加者自己紹介及び現在の活動状況等について

○ 板垣さん

2007年からるんびにい美術館に勤めている。社会福祉法人が文化施設を運営しているのは、全国的にも珍しく、開館当時は全国で2、3カ所と先駆けの施設である。知的障がいのある作者の作品を中心に展示しているが、それに限らず、人の命やあらゆるものの命について感じさせ、考えさせるような展示を縦横無尽にお届けする美術館としている。

もう一つ、アートディレクターとしての仕事のほかに、「しゃかいのくすり研究所」を立ち上げ、るんびにい美術館の発信の枠組みでは収まりきらないようなことも広げてやっていきたいということで、さまざまなイベント、研修、コンサルタント活動を行っている。

文化は、人と人をつなぐ力、人間が人間を肯定するために非常に大事な鍵を持つものと思っており、その文化が岩手にたくさんあるということは、非常に恵まれた風土と思っている。

○ 大内さん

勤務している前沢ふれあいセンターは奥州市内に4つある文化会館の一つで、皆さんに楽しんでいただけるような、ちょっと変わったもの、親子向けのものなどいろいろな企画をしている。

最近では、前沢ふれあいセンターの市民劇場の事務局として市民演劇のサポートをしているほか、もともとは東京都などから演奏家を連れてきて、皆さんにホールで観賞してもらう形でやっていたが、旅費やいろいろな経費がかかるということで、北上市のさくらホールと共同で県内のプロの音楽家が学校や地域に赴き、演奏を身近に聴いてもらうアウトリーチ活動を行っている。

また、珍しい企画としては、市民劇場も後継者不足で、演出をする人や脚本の書き手がないため、参加者を募って15分程度の小劇場を立ち上げて、育成しようということで最近始めているが、コロナ禍でなかなかうまくいかないという現状である。

○ 新田さん

遠野市芸術文化協会には、郷土芸能を除く市内46の団体が加盟している。

遠野市といえば、官民一緒になった手作り舞台の遠野物語ファンタジーが、コロナ禍で残念ながら今年の第47回公演ができなかったが、間もなく50年を迎える全国でも草分けの舞台を毎年2

月に行っている。こちらは、県知事表彰をいただき、遠野市のオリジナルの文化遺産認定制度の遠野遺産にも認定されるなど、長く続けている。

一方で、舞台づくり、活動にあたっての課題なども結構出始めており、コロナ禍で見えてきたものもかなりあるし、市の行政システムが変わり、そこについて行こうとしても意見が合わないなど全体として出ている。

○ 菊池さん

大学入学後、20年位、能楽の謡、舞を習っており、指導も行っている。

Uターン後、平泉町の宿泊交流体験施設「浄土の館」の指定管理を受託して、観光宿泊客を受け入れながら、謡を教える等の事業を行ってきた。

前々年度、前年度と県南広域振興局の紹介で、補助事業を活用して、能楽のプロを呼んで、直接手ほどきをしてもらったりする岩手の能楽文化後継者育成ワークショップを一関文化センターで開催し、皆に能楽を知ってもらう活動をした。

○ 阿部さん

結婚を機に東京都から北上市に移住した。

現在は、北藤根鬼剣舞保存会の会長と北上市民俗芸能協会の理事を務めている。

移住した時は、地元で鬼剣舞というものがあるとは知らなかったが、子供が生まれて、3才か4才の時に、当時3人位で北藤根鬼剣舞が何とか存続している状態だったが、北上・みちのく芸能まつりに参加するので、子供を参加させてもらいたいと言われ、子供の練習に付いて行き、それをきっかけに自分も参加するようになり、今に至っている。

10数年経て、会員は、大人が26名位、子供が最大で18名位まで増えたが、現在は、コロナ禍で公演がない状態が続いて、大人も子供もモチベーションが下がっている状況である。

○ 吉田さん

牧澤神楽は明治34年に発足し続いていたが、その後休眠状態となり、私が平成14年に実家に戻ってきて、地区の同世代に声をかけて活動を再開し、現在に至っている。

今現在もなんとか続いているが、メンバーは実質私の家族という状況で、なかなか他のメンバーが入ってこないため、いろいろアピールするなどやっている。

現在の活動に関しても、コロナ前であれば、年間20公演位していたが、去年は3回位である。

やはり神楽をアピールする機会が全く無いというのが残念だったので、去年は平泉町の菊池さんにお手伝いいただきYouTubeによる配信も行った。

その他、地元の小学校、中学校で「鶏舞」の指導に当たり、運動会での発表にも参加させていただくなど、子供達に教えるというところで活動をしている。

◆ 意見交換

○ 佐々木朋和座長

今、大きなテーマとして、コロナ禍で収入面や発表の場の確保が難しいというお話を伺った。新型コロナウイルス感染症の影響について、他の方々からも伺いたいと思う。

【回答：板垣さん】

るんぴにい美術館に限れば、県内、県外からの来館者が減少した。最も心配していることは、これまで、美術館2階のアトリエで知的障がいのある利用者の方々が行っている創作活動を公開して、自由に見学できるようにしていたが、それが出来なくなったことである。

この見学は、来館された方にとっても、そこでの出会いやコミュニケーションがいろいろな発見や喜びにつながるもので、活動しているメンバーにとっても大きな意味を持つものであった。

というのは、福祉施設で暮らしている方々は、外部の方と接する機会が限られている。多分、施設に入らずに暮らしている私たちと比べると、一生涯に出会う人の数は桁違いだと思う。

コロナ禍で、施設の外とのつながりが無くなり、福祉という閉ざされがちな世界に戻ってしまったことが大きいと思う。

【回答：大内さん】

アウトリーチ活動は、アーティストが小中学校に行く形だが、小学校で感染者が多くなって突然中止になったことや、学校に外部の方が入ることに抵抗を感じるということもあった。

昨年は、インリーチといって、前沢ふれあいセンターにお子さんが来て、聴いてもらう場を作ったが、参加予定だった子が濃厚接触者となって中止になったり、アーティストが危険な状態になったりと、いろいろな影響を受けた。

市民劇場については、奥州市では、8月と2月に新型コロナウイルス感染症で施設が休館となり、小劇場、本劇場とも公演が出来なくなり、せっかく練習したのにという声や、せっかく練習してもまた公演が出来ないのではという不安の声が聞こえてきた。

また、市民劇場の練習の場が不要不急に該当するののかということもあり、運営側、参加者側、観客も慎重になっていると感じている。

YouTubeによる配信も行ったが、年配の方は観る環境にない方も多く、配信は出来ても見てもらえないということで、何か出来ないかと悩んでいるところである。

【回答：新田さん】

遠野市芸術文化協会では、高齢化の現状があり、コロナ禍により、例えば活動ができない、練習も結構休んでいる団体が3分の1程度あると思う。新型コロナウイルス感染症をきっかけに活動が出来ないのであれば、やめてしまおうという団体も出始めている。

遠野市芸術文化協会としては、発表の機会を出来るだけ設けて積極的な参加を促しているが、練習不足で発表することが出来ないという団体が出始めているのが現状である。

市民参加の遠野物語ファンタジーについては、世代間交流を図ることも目的としており、中高生の吹奏楽も参加してきたが、感染リスクを避けるため、この2年間は、規模を縮小して開催した。そのため、遠野物語ファンタジーに参加せずに学校を卒業してしまう生徒もあり、このまま遠野物語ファンタジーから離れてしまう、これをどうやって元に戻そうかと、今後の課題として抱えていることの一つである。

【回答：菊池さん】

稽古に関しては、新型コロナウイルス感染症の感染対策を取りながら続けているが、この2年間は、公演やお祭りなどが軒並み中止となっている。

では、何のために練習しているのかということについてであるが、剣舞や神楽は神様へ奉納することが本質なので、観客がいないことに関してはあまり気にしないようにしている。

好きで活動している団体は続いているし、新型コロナウイルス感染症が収束すれば、またやりましょうということで、希望的観測を持っている。

昨年、文化庁事業を活用し、「NOBODY KNOWSプロジェクト」として、いろいろな方とのコラボで、YouTubeによる配信も行った。

○ 工藤勝子議員

文化芸術活動が地域に与えてきた影響はどのようなものか。また、逆に、活動に対する地域、市町村、県からの協力など望むことは何か。

〔回答：吉田さん〕

地域の活動としては、小中学校で伝統芸能を教えるという流れがあったので、毎月、小学校では指導をしている。

コロナ禍でも、感染対策を取りながら、少し広い会場を使って、継続している状況である。

子供たちもストレス発散の場が必要だと思うので、神楽の練習一本だと飽きてしまうため、いろいろな遊びも交えながらやっている状況である。

昔から、そのような形で続いているので、今後も続けていきたいと思っているし、幸い、活動に対する地区の理解もいただいている。

希望としては、人が集まるところ、例えば一関遊水地などに屋外の音楽堂みたいなステージがあるといいなと以前から思っている。そういう所があれば、発表する機会もどんどん増えるのかなと思う。

〔回答：阿部さん〕

新型コロナウイルス感染症が急拡大する2年間に、周りの諸先輩方から、今剣舞を奉納しないでいつやるのか、という声もあり、地元の神社に行って、疫病退散ということで奉納をし、以降、10回以上行っている。人が見ていなくても、本番という意味合いで、神社で奉納できれば、どうにかモチベーションは保たれている。

コロナ禍の中、自治会から寄付をいただき、同じ地区内の4つの芸能団体と一緒に、2年間中止になった北上・みちのく芸能まつりの日程に合わせて、感染対策を取りながら、地区の体育館で公演することが出来、やって良かったという声をもらった。

この2年間は、小学校の運動会での演技のための指導に行くことが出来なかったこともあり、新しく育成団体に入る子供がいなかった。ことは、こちらから小学校に話したところ、ぜひお願いしますということで、ことは指導に行くこととしている。

子供たちにとっては発表の場がないことは厳しく、何かしらの発表の機会があることが望ましいと思っている。

〔回答：菊池さん〕

これまで、盛衰の歴史を乗り越えて、現在の団体が残っていると認識しており、岩手県はそれが多く、郷土芸能の宝庫であると思う。

バス代などに、行政などからの補助があれば良いが、そのようにして郷土芸能を残すことが行政の施策としてどうかと思う。

また、後継者育成の点では、ある程度学校や地域で強制的に参加してもらおうということが昔はあって、その結果、団体が継続している例もある。

〔回答：新田さん〕

遠野物語ファンタジーは、子供が大人の世界の活動に参加するという意義があり、学校の行事にも組み込まれている。

冬の遠野市には、遠野物語ファンタジー、町家のひなまつり、遠野ふるさと村のどべっこ祭りという、3つのコンテンツがあり、これまではそれぞれでやってきたが、観光PRのコンテンツとして一緒に出来ないか当事者同士で声が上がりに始めている。

遠野市では、行政が文化芸術活動に一生懸命に手を差し伸べる時期があった。その後、文化芸術活動といえども、活動成果を求められ、行政と一緒にやってきたが、なかなか観客数を増やすことが出来ず、指定管理者制度が導入されるようになってからは、市の直営管理だった時と比べると、施設（ホール）を管理する側との関係性が変わってきており、文化芸術活動を行っていくには難しい面がある。

時代の流れもあり、必要な部分は変わっていくべきだとは思うが、文化芸術活動においては、これまで守ってきたこと、継続していることが一番の成果だと私は思っているので、そういった目線で見てもらいたいと思っている。

〔回答：大内さん〕

学校でのアウトリーチ活動をきっかけに、「親子でホールへ演奏を聴きに来て感動しました」というアンケート回答をもらった。

大きなホールで観賞する良さもあるが、目の前で、身近で感じる、生の迫力を感じてもらうことで、夢が見えてきたり、子供たちの興味が広がったりすると思うので、そういう活動はしていきたいと思う。

前沢では小学校の統合によって、地区の神楽保存会の活動が衰退してしまい、今後の後継者育成も出来なくなっている気がするので、そういう部分も何とか出来ないものかと感じている。

〔回答：板垣さん〕

障がい福祉施設からスタートした活動が、花巻市の文化として認められるようになった。作品への関心にとどまらず、作者の存在を入口として障がいのある人たちと社会をつなぐところまで持っていきたいと思う。

新たな事業として、知的障がいのある人が講師を務める講座を石鳥谷中学校で4、5年続けてきたが、課題としては、この講座は理解のある先生を頼みに実施してきたものであり、これをモデル校的な取り組みとしてさらに幅広く展開することが出来れば良いと考えている。

郷土芸能に関しても意見を述べたいが、現在においてもテレビによる情報発信の影響は大きいため、例えば、県の広報番組として帯で郷土芸能活動をかつこよくPRするのはどうか。

るんぴにい美術館でも知的障がい者の作品だけでは裾野が広がらないため、いろいろなチャンネルからアプローチしていくことが効果的であると考えている。

県の文化芸術振興審議会でも発言があったが、文化芸術に関する横のネットワーク形成支援が県からあっても良いのではないかと思う。

○ **岩淵誠議員**

行政からあるいは地域からの支援に求める具体的な内容はどのようなものか。

〔回答：板垣さん〕

障がい者と地域のつながりをつくる場の創出、そのような事業を実施してもらいたいと思う。

〔回答：大内さん〕

指定管理者制度になったことで、施設運営に対する奥州市職員の関与が薄くなってきている。文化芸術活動に対して、行政も見て理解してもらいたい。

〔回答：新田さん〕

遠野物語ファンタジーは、県の助成を活用してYouTubeによる配信をすることが出来たが、申請

手続きは大変だった。手を差し伸べてもらっている反面、申請するにはハードルが高いと感じた。

行政には、文化芸術活動への応援意識を持ってもらいたい。具体的には、公演時の安全面を確保するためのマンパワーの手伝いや、行政からもアイデアやアドバイスなど継続的に関与してもらいたい。

〔回答：菊池さん〕

国が直接処理している事業は簡素化が進んでいると感じている。県についても進んでいると思うが、市町村も含めて一層進めてもらいたいと思う。

小中学校へ協力依頼する場合などは、我々のような団体の活動状況などを知っている市町村や県からの手助けがあれば、スムーズに手続きが出来ると思う。

〔回答：阿部さん〕

北上市に相談しながら、財団や市の助成金をもらうために何とか資料作成をしているが、県の助成金を使うとなると時間的余裕もなく難しい状況である。

先ほどから皆さんの意見であるように、公演の場所がないと思うので、北上市でいえば、さくらホールを借りたいので、使用料分を簡単な申請で補助してもらえれば、他の芸能団体と一緒にやろうとなる。簡素化した申請があれば助かるかなと思う。

〔回答：吉田さん〕

お客さんの有無ではなく、一通り演じることができた、自信がついた、師匠に褒められた、認められたという環境が大事になってくると思うので、会場の借り方などが簡素化されれば本当に良いと思う。

衣装については、以前に宝くじ助成金を使って用意をしたが、さらに10年後に更新出来ればいかなと思う。メンバー全員が仕事をしながら活動をしているので、衣装代を自分たちで出すのは難しい状況であり、仕事とうまく両立させながらやっていかなければならないと思っている。

〔回答：板垣さん〕

一社会福祉法人の事業として文化芸術振興の取り組みを拡充していくには限界がある。今の体制が精一杯だと思う。

例えば、社会福祉法人での文化芸術活動を担当する常勤職員採用に対する補助金や障がい者の芸術活動推進に関するモデル事業的なものを策定して、その事業を県から職員が出向して一緒に事業を推進するなど思い切った踏み込んだ形になると、ぐっと前進するだろうと思っている。